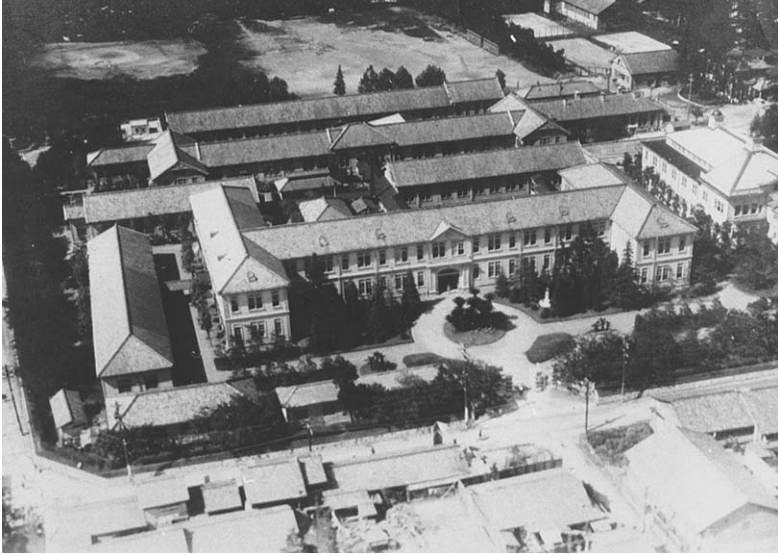


ところで、一九九五（平成七）年には、鏡池東側にあつた工学部実験室建物を解体して、新たに工学研究科1号館（工学部新1号館）が建てられました。そして現在、1号館北側建物跡地に新しく総合研究棟が建てられようとしています。今は、古くなった鉄筋建築を取り壊して、新たな鉄筋建築を建てる時代となつたのです。

#### 四 名城・瑞穂・豊川キャンパスから東山へ ―文学部・教育学部・情報化学部

##### ◆文系地区

理系地区はグリーンベルト北側に位置していますが、反対の南側は、一番西に情報化学部があり、東へ文学部・教育学部・法学部・経済学部の各文系学部の建物が整然として建ち並んでいます。グリーンベルトをはさんで、工学部1・2・3号館とちようどシンメトリ的に配置されています。これらのうち西側にあたる建物Ⅱ文学部・教育学部・情報化学部の三学部に関係する前身旧制学校として、第八高等学校と岡崎高等師範学校がありました。



【図 14】 1933 年第八高等学校（中日新聞社提供）

◆第八高等学校（瑞穂キャンパス）

旧制の高等学校は、帝国大学とは別に、高等教育を行う学校として創設されました。当初は、第一から第五高等学校（東京・仙台・京都・金沢・熊本）までと山口高等学校の六校あり、専門部（法・工・理・医などの専門学科）と大学予科（帝国大学入学への予備教育）とが置かれていました。しかし明治三〇年代に入り、京都帝国大学が新設されたり、地方に医学専門学校が創設されるようになると、専門部の方は振るわなくなり、一方で付随的に置かれていた大学予科の方が主流となり、拡充されていくようになりました。

第八高等学校（八高）は、文字通り全国第八番目の高等学校として一九〇八（明治

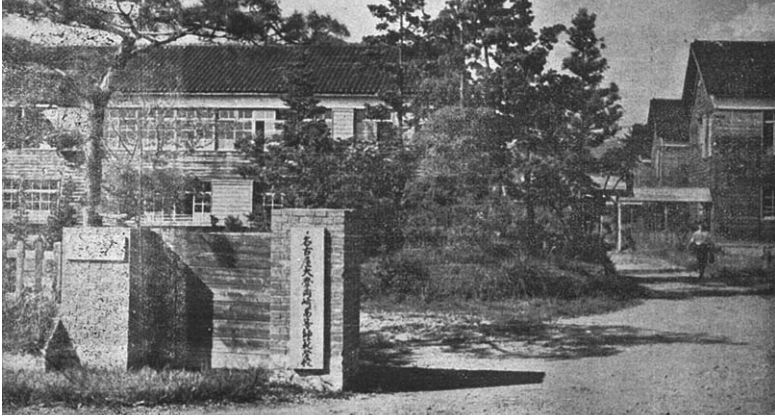
四一) 年三月に創設されました(山口高等学校は高等商業学校に転換)。先の五校に続いて新設されていた六高(岡山)・七高(鹿児島)は、それぞれ第三高等学校医学部・鹿児島造士館高等中学校の流れを汲んでいたのに対し、八高は前身校をもつておらず、その意味で新しい流れをもった高等学校でもありました。

実質の開校は七月で、当初は東区南外堀町(現中区丸の内三丁目)にあった愛知県立第一中学校が前述の西二葉町へ移転したため、その跡の旧校地・旧校舎を借用、東区小川町の妙本寺はじめ付近の七ヶ寺に代用学寮が設けられました。翌年九月から一二月にかけて、愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑(現瑞穂区瑞穂町山の畑)の地に新校舎が順次完成し、並行して移転していききました(瑞穂キャンパス【図14】)。

#### ◆岡崎高等師範学校(豊川キャンパス)

高等師範学校は、師範学校・中学校・高等女学校の教員を養成するための高等教育を行う学校として創設されました。当初は、東京と広島に置かれていましたが、この二校は昭和四(一九二九)にそれぞれ文理科大学に付置された形となりました。また一九四四(昭和一九)年三月には金沢にも創設されました。

岡崎高等師範学校(岡崎高師)はこれらにつづく第四番目の高等師範学校として、一九四五



【図 15】 1950 年頃の名古屋大学岡崎高等師範学校

（昭和二〇）年四月に創設されました。しかし、戦時中であつたため、学科は理科（数学・物象・生物）のみで、校地・校舎を新設せず既設の設備を利用すると、附属学校も当分のうちは代用学校ですませるといふ条件がつけられました。

このため、当初は岡崎市明大寺町字栗林にあつた旧岡崎市立工業学校の校地・校舎（現愛知教育大学附属中学校）を使用、附属学校もすぐには設置されませんでした。五月には入学試験が行われ、七月に入ると生徒が集まりはじめ、校内の教室が臨時宿舍としてあてられました。

ところが入学式・開校式もまだ行われていない七月二〇日に空襲にあい、ほぼ全焼してしまいました。そのため仮校舎を岡崎市針崎町の三菱重工業針崎工場青年学校に、生徒宿舍を同じ針崎町の勝鬘寺に移しました（振風寮）。そして七月三〇日に延期されていた入

学式、八月一二日に開校式、一〇月一日に始業式が行われるという、変則的な日程で出発しました。この後本格的な移転が検討された結果、一二月九日に豊川市牛久保町中代田にあった旧海軍工廠工員養成所とその宿舎へ移転がなされました（豊川キャンパス）【図15】。

#### ◆空襲と疎開（河和キャンパス）

一方、八高はそれよりも早く、一九四五（昭和二〇）年三月一二・一九・二五日の三度の空襲にあい（医学部と同じ日です）、一部の建物を除いて多くを焼失してしまいました。その年の卒業式は焼け残った体育館で行われましたが、校旗も卒業証書もない形だけのものでしたそうです。一方その年の新入学生も、校舎がないため当初は勤労働員先で待機、結局入学式は行われず、七月一〇日から学徒隊に組織された形で、動員先での分散入学となりました。入学式に代わり、校長や教員が動員先へ出張して行われた前代未聞の入学宣誓式が終わったのは、敗戦直前の八月八日でした。

敗戦後は、分散して授業が再開されました。名古屋市内の生徒は、焼け残った体育館や付近の熱田中学校・尾張中学校・愛知県立商業学校などの校舎を借用し、地方からの生徒は知多郡河和町（現美浜町）の全忠寺を宿舎に、河和町南部国民学校を教室としていました。この後、一九四六（昭和二一）年の九月に河和町の旧海軍第一航空隊跡地に移転が行われましたが、翌

年初めには早くも瑞穂キャンパスへの復帰運動が始まります。加えて一月一四日には河和校舎で火災発生、再び瑞穂と河和の分散授業を余儀なくされました。このためもあつてか復興のための寄附金も集まり、一九四七（昭和二二）年九月には瑞穂キャンパスに新校舎が再建されました。

#### ◆文学部の設置（名城キャンパス）

名帝大時代には文系学部がありませんでしたが、敗戦直後から文系新三学部（文・法・経済）設置の動きがおこりました。一九四七（昭和二二）年一〇月に帝国大学の名称がなくなり、名古屋大学（旧制）になると、文系学部設置が具体的に検討されるようになります。文系学部の候補地として、名古屋城内にあった元陸軍歩兵第六連隊跡地（現中区二の丸、名古屋城二の丸内）があたり、一九四八（昭和二三）年六月には大学本部がここに移転を行っています（名城キャンパス）。

当初名古屋大学では、名古屋経済専門学校（五章で後述）・八高を基として一九四六（昭和二一）年より文・法・経済の文系三学部の新設要求を対文部省に行っていました。この段階では夜間部の併設も考えられていました。この三学部要求は、法文学部の一学部とした縮小したかたちで設置を認められましたが、再度折衝の結果、八高を基幹とした文学部と名経専を基幹



【図 16】1960 年名城キャンパス（中日新聞社提供）

とした法経学部の二学部新設で落ち着きました。

しかし理系を含む八高側からすれば、文学部のみでは教員・予算等を振り替えることが難しいのも明らかでした。そのため、八高側では一方で新制名古屋大学の一般教養課程を担当する方向をめざす動きもしており、最終的にはこの方向で八高は新制名古屋大学に合流することとなりました。ただ、八高の教員の中には、新設された文学部に移った方もありました。このようにして文学部は法経学部とともに、旧制の一九四八（昭和二三）年九月に設置されました。校舎は当初の構想通り、先の元陸軍歩兵第六連隊兵舎を利用することになりました【図16】。



#### ◆教育学部の設置（名城キャンパス）

一方岡崎高師の方では当初、他の師範学校・青年学校と合併、愛知学芸大学（現愛知教育大学）を設立する方向で動いていました。しかしこの構想は一時頓挫し、つぎに名古屋大学に合流する働きかけが始まりました。名古屋大学の方でも、文学部に教育学科五講座を設置する動きがあったからです。ただ教育学科は結局設置が遅れ、旧制ではなく、翌一九四九（昭和二四）年の新制文学部の教育学科として発足することが、一九四八（昭和二三）年六月頃には決まりました。またこれら一連の動きの中で、岡崎高師も八高とともに一般教養課程を担当することに落ち着きました。岡崎高師は文（教育）学部の前身ではなく、教養部の前身となったのです。ところが、この決定後の七月、占領軍側から教育学部の設置が強く要請されたため、文学部教育学科構想は急展開し、教育学部として発足することになりました（ただし一講座のみ）。特に名古屋大学の場合、大学全体として岡崎高師を包括することで、教育学部の設置がより有利になったようです。こうして教育学部は、翌一九四九（昭和二四）年五月、新制名古屋大学の発足とともに設置されました。校舎はこれも名城キャンパスに置かれました。

#### ◆教養部の設置（瑞穂・豊川キャンパス）

前述したように、名古屋大学では一般教育を担当する部局を設置するために、八高と岡崎高



師を包括し基礎とする計画が進められました。そしてこの一般教育を担当する部局は教養部（名古屋大学瑞穂分校・同豊川分校）として、新制名古屋大学が発足した一九四九（昭和二四）年五月に実質的に設置されました。各分校はそれぞれ第八高等学校・岡崎高等師範学校校舎を利用しています。ただこの時点では「教養部」は内部規定による呼称でした。

一九五二（昭和二七）年には、両分校が瑞穂キャンパスに統合され、名古屋大学分校（教養部）となり、豊川キャンパスは農学部農場となりました（後述）。その後、名古屋大学分校は、一九六三（昭和三八）年四月にやっと法令的に、教養部として認められました。

#### ◆東山キャンパスの追加取得

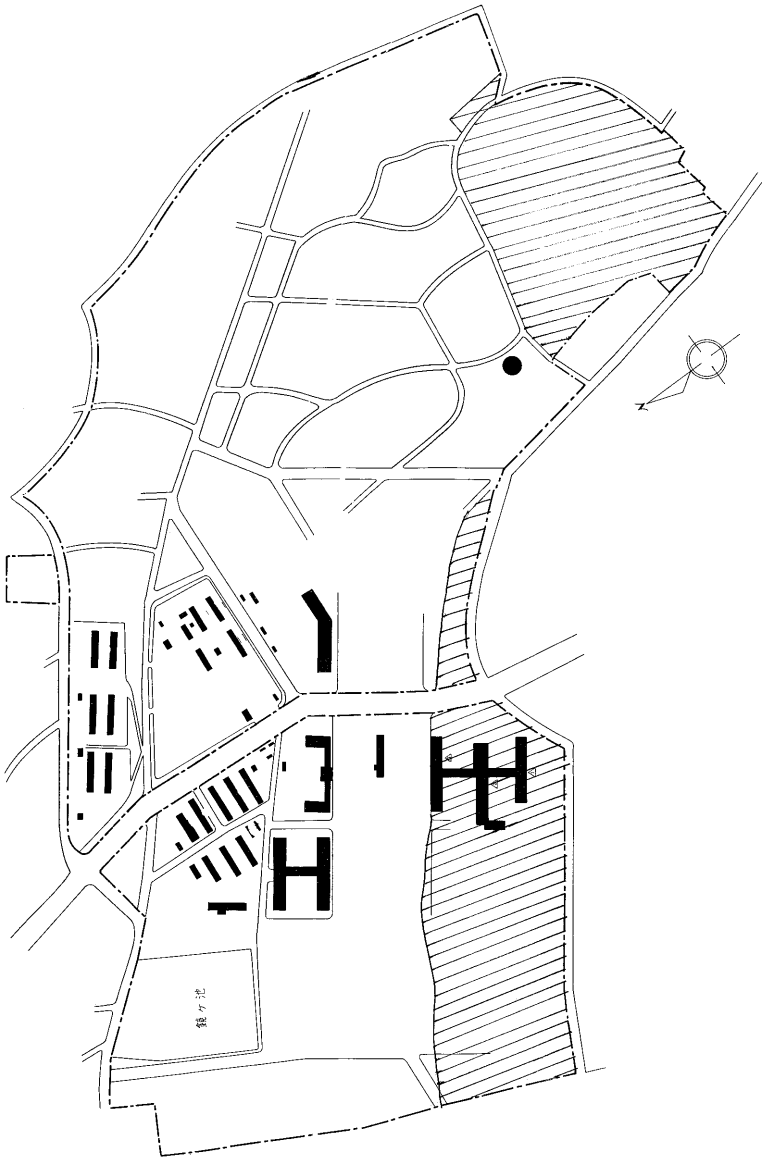
東山キャンパスでは、当初用地取得後も、徐々に土地を購入してきました。しかし、それでも一九四八（昭和二三）年当方で約五三万二六〇〇平方メートルしかなく、当初の必要面積六〇万平方メートルにも達していませんでした。一九五〇（昭和二五）から一九五二（昭和二七）にかけて策定された整備計画では、医学部を除き東山キャンパスに集結させることが決まっていたのですが、このままでは面積不足であり、隣接する用地を新たに取得する必要にせまられていました。そのため約二三万三〇〇〇メートルを新たに取得する計画がたてられましたが、その取得は国費を充当することとされていきました。しかし当時の財政状況から鑑みて、予算措

置が思うようにいく見込みもないため、計画を縮小せざるをえなくなり、結局一九五四（昭和二九）年度からの六年間で約一四万六〇〇〇平方メートルの土地を取得したにとどまりました。しかしそれでも、この土地取得＝拡張によって、東山キャンパスは全体で六九万七五〇〇平方メートルとなり、創設後一五年にしてやっと、創設当初の目標面積を確保することができたのです【図17】。これによって文系地区の建設が可能となりました。

#### ◆文学部・教育学部・教養部の東山キャンパス移転

このようにして文系地区の用地確保はできましたが、実際の移転は、法学部・経済学部が先になりました（五章で後述）。文・教育学部および教養部の移転には、先の工学部高蔵キャンパス移転の際と同じく、建築交換移転という方法が採用されました。当初は愛知県立女子短期大学（現愛知県立大学）と交渉しようとしたがまとまらず、その間に名古屋市中からも建築交換移転の申し出があり、最終的には名古屋市との建築交換移転に到着しました。すなわち、教養部のある瑞穂キャンパスの土地・建物等を名古屋市に譲渡するかわりに、名古屋市の負担で東山キャンパスに教養部と文・教育学部の一部を建設してもらおうというものでした。

文学部は一九六三（昭和三八）年一月に、教育学部は同年一月に移転し（附属高校は同年四月、同中学校は翌年一月）、また翌一九六四（昭和三九）年三月には教養部が移転し、ここ



【図 17】1959 年東山キャンパス図  
斜線部が新規に取得した地区。

に文系地区への集結を完了したのでした。建築交換移転がなければ、これほどはやくに、東山移転は完了しなかったと思われる。

なお、名古屋市に譲渡された瑞穂キャンパスは、現在名古屋市立大学経済学部・人文社会学部となっています。ここには、旧八高のシンボルであった「蘇鉄の木」が依然残されており、その名残りを伝えています。また八高正門も現在は、博物館明治村（愛知県犬山市）に移築され、その正門として残されています。

#### ◆情報文化学部の設置

一九九三（平成五）年四月に四年一貫教育（共通教育）が実施されたのを期に、教養部は同年三月に廃止されました。かわりに情報文化学部が新学部として四月に設置されました。組織上は、教養部と情報文化学部の間には歴史的連続性はありませんが、教養部の教員の多くは、そのまま情報文化学部（あるいは大学院人間情報学研究所）の教員になりました。